



◎特集 / 対談

三重大大学の知を社会へ

三重テレビ放送代表取締役社長 志田行弘 + 学長 内田淳正

三重大学は、教育研究活動の中で得た知財を社会へ発信していくことが地域貢献につながると考え、積極的に広報活動に取り組んでいます。今回は三重テレビ放送の志田行弘社長をお招きし、「情報発信」をテーマにメディアの活用や社会貢献について学長と語り合っていました。

三重県の歴史や文化 自然の魅力を発信していく

司会 本日はお越しいただきありがとうございます。大学の情報発信力が問われる昨今、三重大学ではさまざまな広報活動を展開しております。そこで本日は「情報発信」をテーマに、マスメディアの立場からご意見をいただければと思います。まず、御社の現状や理念についてお話しいただけますか。

志田 現在、日本には各県・エリアに127の地上波民放テレビ局があります。私ども三重テレビは三重県民のためのテレビ局開設を目的に、1969年12月1日に開局し、おかげさまで昨年、開局40周年を迎えました。先達が最も効率の良いサービスエリア確保を見すえて、標高320mの長谷山(三重県津市)に親局送信所を設置したことで、放送エリアは三重県全域、人口約186万人をカバーするほか、伊勢湾岸沿いに愛知県、岐阜県の一部にまでおよび、約280万世帯に視聴サービスを提供しております。また、当社を含む東・名・阪の三大都市圏に位置する6つの地方局が連携して「東名阪ネット6」を発足させ、自主制作番組の配信も行っています。

私どもの経営理念の一つに、「放送事業の公共性・文化性を自覚するとともに、新しい情報産業にも意欲的に対応し、地域社会に対する重大な使命を果たす」という言葉がありますが、県域テレビ放送として、三重県の誇る歴史と文化、恵まれた自然をテーマに、その魅力をもっと深く掘り下げ発信していくことを目指しています。テレビ局にとって視聴率は重要なものですが、私としては視聴率にこだわるばかりでなく、良心的な企業にスポンサーになっていただき、

文化の薫り高い番組が提供できる局にしていきたいと思っております。また、莫大な設備投資が必要でしたがデジタル放送にも早くから取り組み、2011年7月24日に迎えるアナログ放送の停止、完全デジタル化に向けて万全の体制を整えています。

内田 法人化後、国立大学にとって情報発信は非常に大きな課題となっております。これまで大学の研究者は研究面でも教育面でも社会への情報発信量が少なく、国民の皆さんへの説明が不足していました。やはり、説明責任が重視されている時代ですから、社会の理解を求めする必要があります。三重大学は「WAVE 三重大」「三重大X」「Yui」など、主に広報誌による情報発信を行っております。最近では活字だけではなく、視覚からも印象に残るようにDVDの制作、ウェブサイト、インターネットTVなどからのタイムリーな情報発信も増えてきました。また、ラジオでも学生が企画する番組や医学部附属病院の研修医が登場する5分間のミニ番組も放送しています。「三重大X」や「Yui」は、一般の方が手にとって読めるように駅に配布し、さらに「三重大X」は内容についてのアンケート調査をして改善に努力しています。こうした大学発の広報誌が一般の方々にも理解しやすいものになると、テレビやラジオなどのマスメディアにも、我々が訴えていることを取り上げてもらいやすい状況になるのではないかと期待しております。

貴重な知財を伝えるために メディアの活用を

司会 御社は情報発信のプロですが、知の拠点である大学の知財の発信について

はいかがお考えでしょうか。

志田 「三重大X」などの広報誌を拝見しましたが、非常に素晴らしい内容です。これは大変な努力をしてお作りにならないと、ここまでのレベルのものではないと思います。ただ、やはり学長がおっしゃったように、それを多くの人に見せる努力をしなければいけないでしょう。先日、当社の2つの自主制作番組の広報を新聞に掲載いただきましたが、その狙いは番組紹介だけではなく、これらが東・名・阪の局に配信されて、関東・関西を中心に視聴可能世帯人口が約5,000万を越えたと伝えることにあります。この記事によってスポンサー企業の関心を高めることができれば、番組制作の資金獲得にもつながるでしょう。大学もメディアを上手に使えば、さまざまな効果を生むPRができると思います。

内田 そうですね。最近は若い人たちの活字離れが進んでいますから、今後は広報誌だけではなく、テレビやインターネットを使った情報発信にも力を入れていきたいと思っています。三重大学の先生方は各地で公開講座や講演会を開いていますが、御社と連携してそれらを放映していただき、地域の方々にも研究内容や活動をお伝えすることが社会貢献にもつながると考えています。また、メディアを通じた情報発信は、研究者自身がどれだけわかりやすく研究内容を説明できるか試されることになり、社会での評価を知ることで、さらに伝え方を工夫するようにもなります。こうした経験を積み重ねることが、大学にとっては大事なプロセスだと思っています。

志田 活字離れは問題ですが、テレビやインターネットは見るという人が増えている中で、テレビの媒体力は相当なものです。仮に

◎司会・進行
鈴木宏治
すずきこうじ
理事・副学長(研究担当)
専門分野は、分子病理学・
血栓止血学・血液凝固学

大学の先生方が講演されるとしましょう。しかし、数千人から1万人の人たちが一度にお話を拝聴できる施設を三重県で探すのは至難でしょう。ところが、テレビは数百万単位の視聴者を対象にしています。冒頭に申し上げた通り、三重テレビは県民約186万人、県外も加えれば大変多くの世帯人口をカバーしていますから、視聴率が低いときですら数万人、数十万人の人たちが自宅で、または携帯電話で同時に番組を見ていることになります。これほど媒体価値の高いものは他にありません。ただし、新聞は知識と情報の源泉ですから毎日読むべきです。

内田 おっしゃる通りです。ただ、テレビやラジオなど公共の電波を使って情報を発信するには、なぜこの話題を発信する意味があるのか、何の意義があるのかという部分が問われます。大学側が訴えたいと思っていることと、地域の皆さんが知りたいがっていることにギャップがあるならば、これから大学はもっとしっかり考えながら、テレビやラジオを活用していかなければならないだろう

と思います。

志田 学長のお話通り、先生方が面白く楽しくご説明くだされば、より多くの方々の支持を得られるでしょう。ただ、肝心なのは番組の中身です。視聴者は自分の生活にとってプラスになる事がらならば、きっと見てくれるはず。三重大の名物教授、面白い研究に取り組んでおられる先生がいらっしゃったら、どんどん三重テレビに出演してお話ししたいですね。医学や工学、農水産学、文化、歴史、政治、自然など、専門的な情報を持っている三重大の先生方とテレビ局が番組やイベントなどで連携すれば、地域のお役に立てることがたくさん見つかるはず。まさに「知の拠点」としての発信ができるのではないのでしょうか。

自ら率先して取り組める 環境マインドの育成

司会 社会的責任として環境保全への取り組みが、大学にもテレビ局にも重要なもの

となっています。環境先進大学を目指す三重大の最近の活動内容についてご紹介いただけますか。

内田 三重大は2007年にISO14001の認証を取得し、環境保全にはいち早く取り組んできました。本学が作成した「環境報告書2008」が「環境報告書賞・サステナビリティ報告書賞」を受賞(※1)するなど、本学のマネジメントシステムや学生の参画、地域社会との密な連携は全国的にも高く評価されています。昨年は御社の40周年開局記念事業「三重エコビーチ2009」を共催させていただき、津市町屋海岸の清掃も行いました。

志田 開局40周年のイベントとしてご協力をいただき、ありがとうございます。津の海岸線を美しくして散歩できるようにしようと、ビーチクリーンをテーマに県下全域でキャンペーンを行い、多くの皆さまにご参加いただくことができました。当社は企業とも連携してエコ事業なども行っていますが、こうした活動が流行のように取り上げられるのは、本来の姿ではないと思っています。環境保全は当たり前の話で、そうした意識を広げることが重要だと思っています。

内田 三重大が誇るべきは、学生が率先して活動をしている点だと思います。普通、若い学生の多くは自由気ままに生活を楽しまたいという気持ちが強いからです、環境についての意識があまり高くないものです。しかし、三重大では2005年に発足した環境ISO学生委員会を中心に、学生が高い意識を持って、エコバックの持参や再生紙トイレットペーパーの利用、放置自転車の再生利用など学内3R(リデュース・リユース・リサイクル)活動を展開しています。これは手前味噌になりますが、非常に立派なことだと私は感心しています。地球規模でのエネルギー問題の研究ももちろん大事ですが、同時に、身近な生活の場での環境改善について各自が努力できる。そんな環



志田行弘 しみちひろ
三重テレビ放送代表取締役社長
早稲田大学第二文学部卒業後、東海テレビ放送入社
06年三重テレビ放送常務取締役営業局長に就任、専務取締役を経て08年から現職



境マインドを持った人間の育成にこれからも努力していかなければなりません。

志田 それは非常に大切なことですね。世界の人口増、高齢化、食料問題、温暖化に伴う異常気象から、身近なゴミ問題まで、これらの課題に立ち向かう若い人を育てるのが大学の役割です。我々にはそれをサポートしていく義務がある。地域のテレビ局としても強い連携をもって取り組んでいきたいと思っています。

高い教養を身につけた 「人財」を輩出する

司会 教育の問題がお話に出ましたが、大学教育や大学の使命である人材育成

についてお考えをお聞かせ願えますか。

志田 テレビはクリエイティブな知的産業です。専門的なスキルや技術は入社後に身につけていただければよろしいのですが、実社会へ出たら即戦力となるように、学生時代には社会常識や広い教養を高いレベルで積んでいただきたい。そのために大学には学生に感動を与え、もっと勉強に身が入る講義をしていただきたいですし、能力を高める仕組みを作っていただきたいと思っています。どうも見ておると、大学に入学後、本も読まない学生さんが多いのではないかと危惧しております。

内田 これは日本の大学全体の問題で、難関大学でもいったん入れば、あまり勉強しなくても卒業できるシステムになっていま

す。最近では、こうした体制を是正しなければと、随分、大学教育のあり方も変わってきました。三重大も専門知識だけでなく、人生の糧になる幅広い教養を身につけさせるような指導に力を入れています。教える方法論は先生方それぞれによって違うだろうと思いますが、少なくともどの分野に進んでも、「三重大はいい『人財』を育てているな」と評価を得られるように努力したいと思っています。

志田 企業人や官公庁の人間が非常勤講師として、学生に対して社会や会社の現実の姿を教える機会がもっとあってもいいですね。また、日本は資源立国ではなく、高付加価値のものづくりを軸とする輸出貿易立国です。理工分野の高い学力が大事です

ので、その底上げを図っていただきたいとも思っております。我々テレビ局の立場から具体的に言えば、技術面を支える電子工学系の学生さんに来ていただきたいし、番組制作や報道、営業分野にも有能な方を期待したい。インターンシップやアルバイトなどで三重テレビの仕事を経験してもらい、テレビ局の仕事がしたいという優秀な方がいらっやれば採用したいと思えます。

内田 ぜひ、よろしく願いいたします。理工系の人材育成については、「パールの輝きで、理系女性が三重を元気に」(※2)という女性研究者支援モデル育成事業を展開しています。また、小中学生の段階から科学に興味を持ってもらおうと「青少年のための科学の祭典」(※3)を開催したり、高大

連携として県内の高校生に大学の高度な研究にふれる機会を提供するなど、早い段階から理系分野への興味を育む教育に取り組んでいます。

大学とメディアの連携が 地域社会の貢献につながる

司会 最後に互いの連携について、今後の展望をお聞かせいただけますか。

志田 当社は三重県で頑張るありとあらゆる人を紹介しようと、「とつてもワクドキ!」という夕方6時から1時間の生番組で月曜から金曜まで毎日1人、県民の方にご登場いただいています。三重大学の先生方はすばらしい研究を行っていらっやいますので、

ぜひお一人ずつ番組に出て研究内容をご紹介いただければと思います。萩本欽一さん肝いりの「キンさぼっ!!」という番組の公開収録も、いずれ貴学で行わせていただきたいですね。また、三重大学カレーなど三重大学ブランドの発信においても、通信販売事業は当社の得意とする分野ですので、産学連携による商品開発・販売などができるのではないかと考えております。

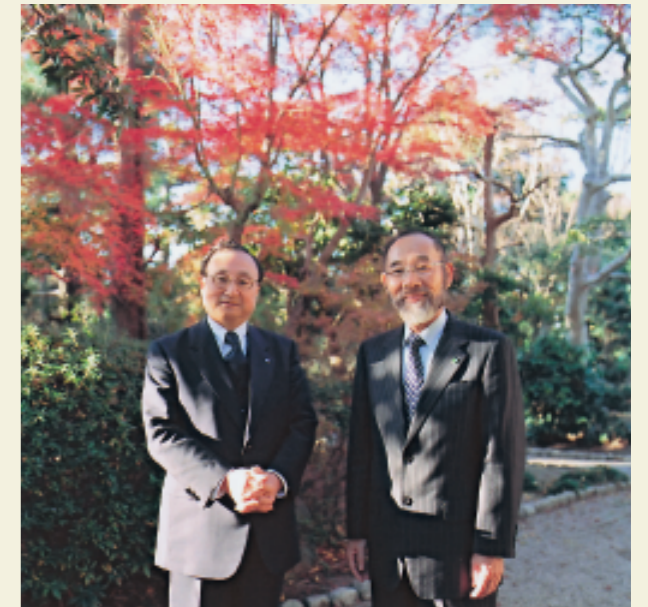
内田 具体的なお提案をいただきありがとうございます。三重大学としては、地域の再生や活性化の視点から、情報の発信でも協調できればと願っております。三重大学ではさまざまな産学官民連携を展開し、例えば「マザーホスピタル構想による周産期医療再生」(※4)や「美し国おこし・三重さ

きもり塾」(※5)など、地域の医療再生や防災対策に取り組んでいます。そこでは地域の人々と一緒に一つのユニットを作って取り組もうとしています。御社でそういう情報を取り上げ伝えていただければ、地域の活性化や再生に効果的に結びつくと思います。やはり、いくら大学や行政が旗を振っても、住民自身が課題を真剣に考え、それに取り組む姿勢や体制ができないと、絵に描いた餅に終わってしまいます。大学や行政の連携にメディアが入って一緒に応援していただければ、非常に大きな力になるはずで

志田 当社は地域のニュースや話題を敏感にとらえ、ニュース番組、情報番組を通じて発信していますが、今後はニュース番組の拡充・拡大も考えています。地域の報道機関としてオピニオンリーダーの役目を果たすために、地方政治や企業姿勢、教育の問題、地域医療や交通アクセスなど、日々の課題を視聴者の目線とらえて伝えていかなければならないと思っています。昨夏の総選挙の際、当社は県内選挙区ごとの立候補予定者に生出演いただき、ゴールデンタイムに政策討論番組を4日間連続で生放送しました。企画の段階では生放送を危惧する意見も多々いただきましたが、有権者全員が演説会に行けるわけではありませんから、その候補者の人となりだけでも伝わればと思ひ、放送に踏み切りました。このような地域のテレビ局だからこそ可能な、一歩先へ踏み出した番組制作に今後も挑んでいきたいと思っています。その際は貴学の先生方の力もお借りして、一緒に地域を活性化していきたいと思ひます。

内田 三重大学の持つシーズと三重テレビの発信力が連携することで、地域社会にさらに寄与できると思ひます。そのためにも三重大学はさらに教育研究活動に邁進し、情報発信を通じて地域貢献に努めてまいります。

司会 本日はどうもありがとうございました。



内田 淳正 うちだあつまさ
学長 医学博士
専門分野は、整形外科学

(※1) 環境報告書賞・サステナビリティ報告書賞
(株)東洋経済新報社主催の環境報告書の普及およびCSR(企業の社会的責任)の向上を目的とする表彰制度。三重大学は「公共部門賞」を受賞。

(※2) パールの輝きで、理系女性が三重を元気に
科学技術振興調整費による女性研究者支援モデル育成事業。女子高校生を理系進学に目覚めさせ、女子大学院生の多様なキャリアパス支援、女性研究者のキャリア継続をサポートする。

(※3) 青少年のための科学の祭典
実験や工作などを通じて子どもたちに科学の面白さを体験してもらう。(財)日本科学技術振興財団の全国イベント。

(※4) マザーホスピタル構想による周産期医療再生
文部科学省「大学改革推進等補助金(周産期医療環境整備事業)」に採択された事業。三重大学医学部附属病院が県下の周産期医療の核となり、それに関わる人材の確保・育成を行う。

(※5) 美し国おこし・三重さきもり塾
文部科学省「地域再生人材創出拠点の形成」に採択された三重県との協働事業。地域の防災・減災活動を行う人材の育成・輩出を目指す。

「大学や行政の連携にメディアが入って一緒に応援していただければ、非常に大きな力になるはずで

◎特集／対談
三重大学の知を社会へ